

日本放射光学会会長の任期を終えて

尾嶋正治 (東京大学大学院工学系研究科・東大放射光連携研究機構)

2009年10月から2年間の任期で日本放射光学会会長を務めさせて頂きました。この間、会員のみなさまにはご支援、ご協力を頂き、厚くお礼申し上げます。2年間一緒に執行部を担って頂いた、水木純一郎渉外幹事、木村滋行幹事、足立伸一編集幹事、木村真一会計幹事、原田慈久庶務幹事(年齢順?)には大変助けられました。6人の強い同志的結束により新しい試みが実現出来たと思っています。

2年前に就任した際にかかげた方針(マニフェスト)は以下の5つでした。

1. 放射光広報活動、学会会員の増加: 会員1500人を目標にし、放射光学会誌や講習会を充実させるとともに、ブルーバックス「放射光で見る物質のしくみ~ナノテクから生命、地球の起源まで~」の発刊をめざします。
2. 新しい放射光科学の推進: 将来計画を含めた放射光科学のビジョン・ロードマップを策定します。
3. 若手研究者の育成: 奨励賞、および「若手を中心とした研究会」を継続します。
4. アジア・オセアニアの放射光科学のリーダーシップ: AOFSSRの継続と発展、ならびにSESAME支援を通じて国際的な貢献を行います。
5. 財政基盤の確立をめざします。

実は、2009年9月末に日本学術会議「学術の大型研究計画分科会」からマスタープランを取りまとめるので放射光学会として1月はじめに放射光将来計画提出し、1月末のシンポジウムで発表するように、との連絡が参りました。そのため、急遽兩宮慶幸前会長に光源計画WG主査をお願いしました。また、放射光科学の観点からビジョン・ロードマップを策定することが必要であるとの認識のもと、水木純一郎渉外幹事に特別委員長を引き受けて頂きました。この議論につきましては、2011年9月号に報告書を掲載いたしました。水木幹事はこの10月から放射光学会会長の重責を受け継いで頂いています。2012年6月に予定されている大型研究計画マスタープランのmajor revisionに向けて頑張ってくださいと考えております。

また、2009年9月に発足した民主党政権ではマニフェストに従って事業仕分けが行われ、スパコンとSPring-8がやり玉に挙げられて激震が走りました。11月13日の事業仕分けでSPring-8では予算を1/3~1/2カットというとんでもない判断がなされ、放射光コミュニティとして強く抗議をいたしました。11月18日に全ての学会中最も早く文部科学大臣あての要望書を提出し、また、全世界から

SPring-8 支援メッセージを集めて11月30日には文部科学省後藤政務官に提出いたしました。最終的には49通の支援手紙が集まり、放射光科学の国際協力ネットワークの強さが証明されました。12月4日には学術会議第3部岩澤康裕部長が音頭を取られて事業仕分けに対する20学会長合同記者会見が開かれましたが、いろんな学会から放射光の重要性が強調され、大変心強く思いました。

その際に痛感したのは、アウトリーチ活動の重要性です。日本では科学・技術のリテラシーが低いと言われており、放射光に限らず、いろんな機会を捉えて科学・技術の重要性を分かりやすく国民目線で訴えることが必要です。放射光学会では毎年市民講座を行っており、2009年1月の放射光学会合同シンポジウムで開催した公開市民講座@安田講堂では約700名もの参加がありました。しかし、内容的に難しく分らなかった、という声も聞こえてきましたので、放射光学会としては是非ブルーバックスを発刊したいと考えた次第です。幸い、講談社編集部の理解も得られて進めて参りましたが、これが思った以上に大変な事業で、対象とする読者をどこに絞るかに苦心しました。結局「理科好きの高校生」を対象とすることにし、まずはこれを発刊し、もっと易しい「中学生向け」とさらに読み応えのある「大学生向け」については何年後に考えることにいたしました。足立編集幹事の超人的な努力で9月20日発刊は守られ、ほっとしております。ネットの書評では好評を頂いております。

また、会員増強は喫緊の課題でした。私が引き継いだ時は3年連続で減少しており、1244名まで減っていました。そこでいろんなネットワークを駆使して会員増強活動を強力に推進いたしました。しかし、放射光を使っている研究者の数は大幅に増え、放射光なしでは研究が進まないという声が多く聞こえて来る反面、学会加入にまで至らない、という状況が見えてきました。また、学会員のメリットも少しあいまいになっている、という意見も出されました。そこで、各大学に呼びかけて学生会員を大幅に増やすとともに、さらに正会員の掘り起こしを行いました。その結果、会員数は1370名以上になりましたが、私の任期中に1500人という目標には達せず、力不足を痛感した次第です。これも反省点の1つです。

学会の年会・合同シンポジウムにつきましては、姫路で第23回、つくばで第24回が行われ、参加数や発表数ともこれまでの記録を破る、という大盛況ぶりでした。木村行

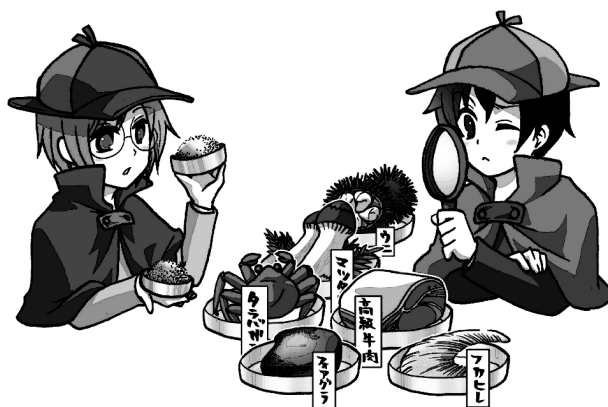
事幹事，ならびに実行委員会，プログラム委員会の大変なご尽力によるものと厚く感謝しております。また，若手講習会，基礎講習会も大変盛況で，学会としていいカルチャーが出来つつあると考えています。

また，財政基盤についても見直しも行いました。これは学会にとって長年の懸案で，年間6回発行の放射光学会誌に会費収入のほとんどが使われており，学会として講習会などで収益を上げていない現状では合同シンポジウムの企業展示による収益に頼らざるを得ない状況を何とかすべき，という議論が続いていました。我々はこの現状を打破すべく，放射光学会誌の改革に着手いたしました。具体的には会誌フルカラー化をまず二色化にし，そこで浮いた資金を会誌電子化の費用に充て，数年後には完全電子化する，という構想です。これについて全会員にアンケートを採り，その方針を評議員会で承認して頂きました。ここまで辿り着けたのは木村会計幹事と足立編集幹事の大変なご努力のおかげです。まだまだ課題は残っていますが，会員サービスの向上をめざして一步一步進めていきたいと考えています。

最後に，原田庶務幹事にはかなり無理を聞いてもらい大変感謝しています。何とかここまでやって来られたのはタフでフレキシブルな原田氏のおかげだと思っています。また，学会事務局の佐藤亜己奈さんにはいつも迅速で正確な

対応をして頂き，本当に助けられました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

放射光は今や物質科学，生命科学にとって不可欠のツールになりました。21世紀の日本が国際競争力を維持しつつ生きていく上で放射光は国力の源である，と強く確信しております。今後とも放射光科学の発展にご協力をよろしくお願いいたします。



放射光学会キャラクター：コータとリョーコ

2011年度幹事報告

庶務幹事を終えて

原田 慈久 (東京大学大学院工学系研究科)

精一杯な状態で庶務幹事を務めてきたことをこの紙面でご報告してから早1年が過ぎ、再び振り返ると後半の1年は運営に余裕が出てきた、というよりも、1年目がいかに混乱の中で始まったかということを感じ知らされます。結果的に、1年目も2年目も、内容こそ違いますが、放射光の対外アピールのための活動が多くなりました。

学会の目玉の一つであったブルーボックスは、足立編集幹事の強力な推進力によって無事尾嶋体制のうちに発刊まで漕ぎつけました。私も庶務としてではありませんが、編集担当、執筆者の一人として、放射光学会を対外的にアピールする最も大きな活動に関わることができました。このような活動は、始める段階ではいろんな声が聞こえてくるのですが、いざ最後までたどり着くと不思議と前向きな声が集まってくるものです。若手研究会にも主催者として関わりました。第1回、第2回の若手研究会の完成度が高く、身のある学会行事として定着するかに思われた第3回目は、予想に反して応募者が非常に少なく、私と同じかあるいはもっと若い世代の、もっと多くの若手に声を上げてもらいたかったというのが正直なところでした。学会からの援助が出るということ以上に、若手自らが100人規模の研究会を主催する経験そのものに大きな意味があって、図らずも運営側であるはずの私ができることを身をもって体験することとなりました。来年度以降この行事がますます活発になることを強く願って、多くの若手に声をかけてゆく

つもりです。こうしてみると、庶務幹事として達成したものというよりも、学会活動を盛り上げるためにいろんな行事に積極的に関わりました、という報告でしかありませんが、それも庶務の重要な仕事の一つということでご容赦願います。

尾嶋体制の目標の一つであった会員増強に関しては私にできることがあったはずなのですが、初年度の100名の増強ののち、庶務幹事として目に見える活動を何もしなかったことが、そのまま2年目の現状維持という形で現れました。会員というものは、無理矢理に集めて維持されるべきものではありませんが、この学会の立ち位置として、対外的な放射光のまとまりを示すこともあるわけで、産業界も含めて、継続的に学会活動への参加がもたらすメリットを宣伝してゆく努力を怠ってはいけなさと感じています。

この2年間、学会運営に携わることができ、無事終えた達成感とともに、はたして本来の庶務幹事としての役回りはこれで良かったのだろうかという一抹の不安もあります。しかし事業仕分けから始まった幾多の困難を乗り越えて、少なくとも学会執行部が全体としてうまく回っていたことは間違いなく、その一助となったに違いないと前向きにとらえています。最後になりますが、私を支えて下さった尾嶋会長、幹事の皆様、評議員の皆様、そして影の庶務幹事として働いて下さった事務局の佐藤さん、西野さんに深く感謝いたします。

行事幹事を終えて

木村 滋 (高輝度光科学研究センター)

2009年10月1日から2011年9月30日まで行事幹事を務めさせていただきました。担当当初は学会行事をどのように進めていけば良いのかをよく把握できておらず、山本雅貴前行事幹事や学会事務局の佐藤さんに助けていただきながら何とか務めることができたと思っています。

行事幹事として一番重要視した行事は、やはり日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム(年会・合同シンポ)です。これを成功裡に終了させるため、企業展示会

への出展依頼を多くの企業の方々にさせていただきました。なかには厳しいお声をいただくこともありますが、景気があまり良くない状況にもかかわらず、多くの企業の方々が出展していただけるおかげで、年会・合同シンポが成り立っています。会員の皆様にも是非このことを意識していただきたく思います。放射光科学の発展には多くの企業の方々の技術的なご協力が不可欠だと思います。年会・合同シンポの折には、出展企業の方々と積極的に意見や情報

を交換し、今後の放射光科学の発展に繋げていただくことをお願いいたします。

年会・合同シンポ以外の行事としては、若手研究会と放射光基礎講習会が最近の主要行事になっています。詳細は本誌での報告に譲りますが、それぞれ第2回と第3回を開催することができ、充実した内容であったと思っております。これら行事が今後も継続し、若手研究者の育成や潜在的な放射光ユーザーの拡大に繋がることを期待しております。

行事幹事を務めさせていただいてから、年会・合同シンポの学生発表賞選考や若手研究会審査などで、審査員を多くの会員の方々にお願いしました。本学会員の皆様は、ほ

とんどの方が快く引き受けて下さり、行事幹事としては大変助かりました。学生や若手研究者にとって著名な先生方に自身の研究について議論いただけることは大変貴重な機会になっていると思います。私自身としても、このような学会行事を通じてこれまで研究上のつながりが薄く、面識のなかった大勢の方々と知り合うことができたことに大変感謝しております。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えていただいた尾嶋会長をはじめ、他幹事、評議員、行事委員、事務局ならびに会員の皆様に大変お世話になりましたことを感謝いたします。

編集幹事を終えて

足立伸一（高エネルギー加速器研究機構）

前任の櫻井吉晴氏から編集幹事を引き継いで、2009年10月から2011年9月までの2年間、編集幹事を務めさせていただきました。その間、編集委員の皆様、学会事務局の佐藤さん、そして尾嶋会長と各幹事に温かく支えていただきましたことを、この場をお借りして改めて深く感謝いたします。この2年間に編集幹事として行った作業を整理しますと、編集委員会として行ってきた(1)学会誌「放射光」の編集と発行、(2)「検出器ガイド」の出版、(3)学会誌の2色刷り化と電子化の検討があり、また尾嶋会長を中心として進めてきた(4)ブルーボックスの出版事業を挙げることができます。

「放射光」の編集では、編集委員からの活発な記事提案をいただいて、常に半年後までの記事提案が埋まっているという大変ありがたい状況でした。編集委員会は年3回しか開催されませんが、その間を埋めるために編集委員会のメールリングリストを作り、随時記事提案を受け付け、メール審議を行うことで、時機を得た記事提案が可能になったことも活発な記事提案につながりました。また23巻1号から巻頭言が毎号掲載されるようになったことにお気づきのことと思います。毎号の巻頭言では、放射光学会設立当時から学会活動に縁の深い先生方に原稿をご依頼し、学会を取り巻く最近の情勢や、学会に残しておきたい過去のエピソードなど、幅広い内容についてご自由に執筆いただいています。今後も、様々な先生方から独自の視点で含蓄の深い原稿をお寄せいただけるものと期待しております。

講談社サイエンティフィックから出版された「放射光ユーザーのための検出器ガイド」は、学会誌上で13回にわたって連載された「検出器シリーズ」を元に、シリーズを担

当された岸本俊二氏と田中義人氏により編集されたものです。お二人ともご多忙の中、放射光ユーザー必携の検出器テキストを実現するために、ボランティアで尽力されました。大学での放射光研究関連の講義や、講習会でのテキストとしても最適な書籍です。学会員の皆様には是非一人一冊ご購入されることをお勧めいたします。学会HPから学会員特別価格で購入いただけます。学会誌の2色刷り化と電子化の検討結果につきましては、24巻5号にこれまでの経緯が詳しく掲載されております。これまでのフルカラー冊子体の学会誌への愛着もありますが、学会の将来像を見据えて2014年1月を目途に学会誌の完全電子化を進めることとなりました。学会員の皆様には学会会計をめぐる昨今の事情をぜひご理解いただき、より使いやすく身近な電子版学会誌の実現に向けたご提案を、編集委員会にお送りいただければと存じます。

もう一方の出版事業である講談社ブルーボックス「放射光が解き明かす驚異のナノ世界」は、学会アウトリーチ活動の活性化を担う重要な柱として、尾嶋会長の強いリーダーシップで実現したものです。会長・幹事会を中心に企画を立案し、各章の担当者と執筆者の皆様、そして講談社出版部の小澤久氏に多大なるご協力をいただきました。この書籍が、理科好きの高校生、大学生に愛読され、それをきっかけに将来の放射光分野を担う若手研究者が育ってくれば、これに勝る喜びはありません。当初は2011年1月のブルーボックス刊行を目指しておりましたが、全体の工程管理を行った編集幹事の不手際で、任期最後の9月末の出版となりましたことを改めてお詫び申し上げます。

これまで2年間の任期中での様々な議論や作業を通じ

て、編集委員の皆さんと学会誌の編集を超えたつながりを持つことができたことが大変ありがたく、私自身の大きな財産となりました。後任の玉作賢治氏には、学会誌の電子化という重い課題を残すことになりましたが、玉作氏の卓

越した企画実行力と編集委員の皆さんの手堅いサポートで、素晴らしい電子版学会誌が実現することを期待いたします。

渉外幹事を終えて

水木純一郎（関西学院大学理工学部）

私の渉外幹事としての仕事は、1年目の「行政刷新会議」、いわゆる事業仕分けで出された SPring-8 の予算を 1/3 から 1/2 減額するというとんでもない案への対応でした。国内はもちろんのこと、海外の研究者からも多くの Supporting letters を貰うことができ、これらをまとめて尾嶋会長が文科省に要望書とともに持って行かれ、効果絶大であったことは放射光学会員の皆様にも記憶に新しいことと思います。さらに1年目の後半に日本学術会議から大型研究計画マスタープランの提出依頼があり、事業仕分けと相まって尾嶋会長を中心とした幹事一同、学会として明確なビジョン・ロードマップを持たなければいけないと痛切に感じた年でした。これは2年目にもそのまま引き継がれ、会長の下に放射光サイエンス特別委員会が設置されました。渉外幹事として関わったわけではありませんが、この特別委員会の委員長（まとめ役）を仰せつかり大変でしたが（他の人からは「大変でしょう」と言われ、「はい、大変です」と答えていたのですが）、実は楽しい委員会でした。それは、様々な分野から将来の放射光学会を背負って立つであろう若手、中堅研究者を中心に委員会メンバーになっていただき、活発な議論をしていただいたからです。勉強させていただきました。委員の皆さん、あり

がとうございました。

一方、「渉外」とは外部と連絡・交渉することが仕事であることを思うと反省が先に立ちます。学会の外に対しての広報活動としては、ホームページがあげられ、1月の年会での幹事就任挨拶では、「ホームページの充実」を挙げたのですがほとんどそれに手を付けることができませんでした。反省に基づく一案として、渉外幹事の下に数名のホームページ委員会を設置し、ホームページ充実を専門に議論しアップデートしていく専門家？部隊を設けることを提案します。

ご存知のように今年3月11日に未曾有の東日本大震災で KEK・PF が大きな被害を蒙りました。これに対して素早く震災を免れた各放射光施設が協力して便宜を図り、PF ユーザーを引き受けられました。このような協力関係ができていたことをうれしく思いましたが、放射光学会の渉外幹事としてお手伝いできなかったことを悔やんでいます。

最後になりますが、尾嶋会長の軽快なフットワークに大変助けられましたし、勉強もさせていただきました。感謝いたします。このような素晴らしい会長の後を継ぐ次の会長はさぞかし大変だと察します。

会計幹事を終えて

木村真一（自然科学研究機構分子科学研究所）

私の在任中は、学会の財政基盤を確立することを目標として会計の見直しを行ってまいりました。そのために、基本的なことですが、収入の増加と支出の減少の方針を立てました。まず、収入の増加のために、各放射光施設や団体を対象とする特別賛助会員の案を作りました（24年度総会で審議予定）。この収入から、アジア・オセアニアフォーラム AOF への協賛金や各種イベントの経費を賄うこ

とを考えておりますので、対象となる団体は積極的な参加をお願いいたします。また、会長・編集幹事及び委員のご努力によって、ブルーボックスや検出器シリーズの単行本化が行われました。その印税も学会収入に組み込まれる予定です。一方で、支出を減らすために、会費収入の8割以上を占める学会誌の印刷費用を下げるための2色刷りの案を編集委員会および幹事会で検討し、アンケートを行

った結果、オンラインのみの出版に移行するという更に一歩進んだ案になりました。この結果、印刷費はなくなりますが、オンライン出版費が新たに加わります。これで支出がどの程度抑えられるかはわかりませんが、学会には会員へのサービス（会費の値下げや会員参加のイベント等）を期待します。

一方で、任期の間に行えなかったこととして、賛助会員数を10年前の水準に戻すことがあります。2007年度に会費を値上げしたことは記憶に新しいですが、現在は企業等の賛助会員からの会費収入が10年前に比べて約1/3に

激減し、会費の値上げ分を相殺してしまっております。現在、放射光周辺の企業には賛助会員への積極的な勧誘は行っておりませんが、一般会員26人分に相当する賛助会員〔放射光23,405(2010)参照〕の獲得は、学会収入を押し上げるのに極めて有効ですので、現執行部には、ぜひ賛助会員数の増加の活動をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、この2年間の会員や事務局・会長・幹事の皆様のご協力・ご理解に感謝するとともに、今後のますますの学会の繁栄を願い、幹事を引継ぎたいと思います。